

日本の四季を生み出すアジアモンスーン(季節風)は、地球全体の気候システムを大きく左右している。また、30億人以上がその影響を受けながら暮らしている。名古屋大地球水循環研究センターの安成哲三教授(57)は79年、ヒマラヤでの気象観測を元にアジアモンスーンに30〜40日周期の規則的な変動があることを発見した。以来、四半世紀にわたってアジアモンスーンの解明に挑んできた安成さんの関心は最近、生態系と気候の関係にまで広がっている。



挑む 研究者たちの素顔

◆.....68.....◆

◆中学、高校と山岳部、大
学では探検部に所属した。
南極やヒマラヤ、地球の
あちこちに行きたいとい
う思いが昔からありました。
本音を言うと、科学は探検
をするための手段だったの
ですが、地球というものが
どういった仕組みなのかを
知りたいというのが研究の
道に進んだ原点です。
大学時代にダーウィンの

アジアモンスーンの解明に取り組む 名古屋大地球水循環研究センター教授 安成哲三さん(57)

やすなり・てつぞう 1947年、山口県下関市生まれ。77年京都大大学院理学研究科修了。京都大助手、筑波大教授などを経て、02年8月から現職。名古屋大21世紀COE拠点リーダー、海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センタープログラムディレクターを兼務。
◆3年生のとき、念願の延べ1年余りをヒマラヤでパタゴニアに行き、半年滞り過ぎました。博士論文も在。1年留年して大学院に書かないまま博士課程の3年が終わりました。

大陸移動を説明するプレートテクトニクスを研究し、の降りに、周期性がある

「丸ごと見る」視点を



ごく後退していて、小さな水河はあちこちでいくつも消えています。
僕らが観測を始めた70年代は水河の末端にも雪がかぶっていて、太陽光を反射して水河が解けるのを抑制していました。しかし、ちよっと気温が上がると雨になり、雪より黒っぽい水が日射を吸収して解けることが分かってきました。地球システムの怖いところは、ちょっとした変化でがらりと転んでしまう部分が多いことです。
20世紀は学問の分化の時代で、それが科学の発展を支えました。しかし、地球科学では、地球を丸ごと見る視点が大事です。一番やりたいのは、植生と気候の関係を見直すことです。気候によって植生が決まると考えられています。僕らのシミュレーションによれば、もしユーラシア大陸に植物や土壌がなければ、今ほど強いアジアモンスーンは吹かないのです。環境への適応と自然淘汰を柱とするダーウィンの進化論とは別の考え方が必要かもしれません。

ようと思ったのですが、当時は一通りのことはいったい分かったという雰囲気がありました。むしろ、大陸移動に伴う気候変動の方が面白そうに思えたので、気象学を選びました。

博士課程1年の時、ヒマラヤの水河・気象観測プロジェクトに加わりました。ネパールの標高4500mの地点に小屋を建て、結局、

「挑む」は今回で終了します。1月から「理系白書05」を掲載します。

「雨期の中休み」といって、インドの人々は昔から体験的に知っていることで、もう少し広い目で見てみると、偶然、東大の研究室で見つけた気象衛星の写真を借りてきて、百数十日分コピーしました。当時は、熱帯気象は東西方向の変動が重要だというのが常識でしたが、私はモ

ンズーンは南北に風が吹く現象だから、南北方向で見ただけだと単調に考えていました。ヒマラヤを含む部分を南北に短冊状に切ると、日にち順に並べて見ると、赤道からヒマラヤに向かって雲が流れて行く様子が見えてきました。地球温暖化と言いますが、ヒマラヤやチベットの気温はそれほど上がっていませんよ。今、大気中の二酸化炭素が増えたというので

「聞き手・西川拓」